

タイトル	学校運動部活動の構造変化：体育とスポーツのダイナミズム
著者	永谷，稔; Nagatani, Minoru
引用	
発行日	2019-09-30

〔 1 〕

氏 名 ・ (本籍地)	なが たに みのる 永 谷 稔 (愛知県)
学 位 の 種 類	博士 (経営学)
学 位 記 番 号	博 (経営) 甲第 1 4 号
学位授与の日付	令和元年 9 月 3 0 日
学位授与の条件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学 位 論 文 題 目	学校運動部活動の構造変化 ―体育とスポーツの ダイナミズム―
論 文 審 査 委 員	主 査 教授 澤 野 雅 彦 副 査 教授 大 平 義 隆 副 査 教授 伊 藤 友 章

論 文 内 容 の 要 旨

中学・高校の部活動は、世界的に見ても相当に珍しいものであるが、もうすっかり日本社会に定着した。本論文は、まず、部活の成立・定着を歴史的に考察し、これを踏まえて、部活の現況を示し、問題点を洗い出して改善策を提案することを試みたものである。

明治期に、外国人教師によってスポーツが学校へともたらされ、一方、兵式体操が学校教育に組み込まれる。のちに、森有礼によってスポーツも兵式体操も含む体育という教科が生まれる。高等師範学校校長であった嘉納治五郎は、スポーツを奨励し課外活動として学生たちに勧めた。そして、教員となった卒業生たちが全国の学校に広めることにより部活が定着し、敗戦後 GHQ も全国大会の回数は規制したものの、部活自体は温存された。

歴史的に部活は、生徒による自主的課外活動であったが、徐々に競技性を強め、1980 年代頃から頻発する事故・事件への対応により、管理を強めた。顧問の負担が急増し、ブラック部活と呼ばれるようになる。そのため、多くの団体・識者が、改革の提言を行っているが、これらに詳細な検討を加えて、結論として、負けることが許されないトーナメントをリーグ戦にするなど試合方式の改革と、地域との連携が重要だとする結論を示している。

論文審査結果の要旨

1 審査の経過

令和元年 6 月 5 日に、博士請求論文が提出され、同年 6 月 14 日の大学院経営学研究科博士（後期）課程委員会（以下、研究科委員会という）において、審査委員に、主査澤野雅彦、副査大平義隆・伊藤友章が選任された。その後、慎重に審査が進められ、令和元年 7 月 13 日に公開報告会が開催され、同日口頭試問が行われた。

2 評 価

筆者は、自ら大学の女子バレーボール部の監督として、運動部活動の指導を行う傍ら、長期にわたって運動部活動の研究を行ってきた。その蓄積を踏まえて、今回の研究を行ったものである。近年、トラブルの噴出とともに、運動部活動の研究はなされるようになり、さまざまな議論が出ているが、それらの研究を広くサーベイして、論述を進めている。

また、本論文の特徴は、明治初期の学校成立にまで遡って、運動部活動の形成やその働き、その目的も明らかにしているところであるが、運動部活動の歴史について、少なからず研究が見やれるようになったものの、多くは戦後の研究にとどまっており、戦前に言及する研究はほとんど見ない。その意味で、本論文は相当の希少性を持つものといえる。

創成期・普及期・復活期・安定期・混迷期という時代区分も的確で、随所に時代背景とスポーツ情報がちりばめられて読みやすく、高く評価することができる。

3 学内の手続き

提出された論文の審査ならびに文書及び口頭による最終試験の結果は、本学学位規則第 7 条に基づき令和元年 7 月 19 日の研究科委員会で審査委員会主査から報告され、同日から同年 7 月 26 日までの間、研究科委員会構成員の閲覧に供するため博士論文の公開を経て、同年 7 月 26 日研究科委員会において、構成員による投票が行われ、同論文を合格と決定した（同規則第 8 条第 1 項）。

その後、同年 9 月 17 日、北海学園大学大学院委員会が開催され、同論文について経営学研究科長より、委員会の審査経過ならびに論文要旨の報告がなされ、合格とすることが承認された（同規則第 10 条第 2 項）。これに基づき、同年 9 月 30 日、博士（経営学）の学位が授与された。